

優秀賞

「憎しみも愛情へ」

東京都・駒込高等学校1年 段野 美桜

私は祖母が好きだった。優しく、料理が上手で、歌が好きで、仕事で忙しい両親の代わりに、目一杯の愛情をかけて私を育ててくれた祖母が。両親が側にいてくれなくても、祖母が側にいてくれたら、それだけで幸せだった。

そんな祖母が認知症になった。まず、会話が成り立たなくなり、傷んだ料理を出してきたり、まだ洗濯をしていない衣類を干したり。終いには、金に執着し、実の娘である私の母や父に対して「お前が金を盗んだのだろう」とまで、言い出すようになった。そこにはもう、私の好きだった祖母の面影はなかった。そして、その頃からだろう。私の祖母に対する思いが変わってしまったのは。

月日が流れるにつれ、祖母の認知症も進行した。祖母の記憶は、過去と現在が混じり合い、とうとう現在の私は、祖母の中から消えてしまった。祖母の中に残ったのは、幼い頃の私だった。そして祖母は、私に手をあげるようになった。あんなに細い祖母の腕から、どうしたらこんな力が出るのだろう、というくらいの強さで。私も最初は抵抗をした。でも、大好きだった祖母に手をあげることは、私にはできなかった。祖母がいつも身に付けている指輪の形をした痣が、悲しみでできた染みのように、私を汚していった。私は、ただただ泣くことしかできなかった。

祖母の認知症は、私の好きだった祖母を殺した。そして、家族をも壊そうとしていた。祖母の変わり果てた姿に、母は泣いた。生まれて初めて見る母の涙だった。両親は、祖母を施設に入れるか入れないかで、何回も何回も言い争っていた。認知症は全てを変えた。祖母を。家族を。生活を。そして、私の心さえも。私は祖母に対し、憎しみしか持たなくなつた。悲しみを通り越し、憎かった。祖母が。認知症が。祖母を好きな気持ちを掻き消すほどに。

結局、祖母は認知症専門の施設に入ることとなった。祖母が施設に入る日、私は母と同行した。太陽の日差しがあたたかい、明るい場所だった。祖母の部屋は四人部屋だったので、荷物を片す前に、母と一緒に同室の人へ挨拶をした。ああ、この人達も認知症なんだ、と思うと、少し嫌悪感が湧き出た。でも、その同室のおばあさんは、私に笑いかけてくれた。柔らかく、優しい笑顔だった。そのとき、私はふと気付いた。祖母は認知症になってから、一度も笑っていないということに。それに気付いたとき、私の中から憎しみは消え、もう一度、もう一度だけでいいから、祖母の笑顔がまた見たい、と思った。

祖母は、認知症の進行を遅れさせる薬を飲み始めた。施設内では、友達もでき、折り紙や習字、ビデオを見たりと、楽しみも見つけているようだ。私にできることは、そんな祖母の話に耳を傾けたり、着替えを手伝ったりと、小さなことしかできないけれど、祖母は笑ってくれるようになった。昔と変わらぬ笑顔で。その笑顔を見ると、私も母もつられて笑う。暗闇の中で見つけた、小さな光だ。だけれども、それだけで充分心は満たされている。

祖母の認知症が治ることはない。どんどん進行していくことだろう。それでも私は、祖母と一緒に認知症と戦い、支え、祖母の笑顔を守ろうと思う。祖母の中から過去が消えようとも、それを上回る未来をつくってあげたい。私にとって祖母は、かけがえのない、たった一人の大切な人で、愛する家族だから。

共に生きるということは、相手の良しも悪しも全て受け入れて、隣を歩くことだと実感した。